

# 海外引揚がつなぐウズベキスタンと舞鶴の縁 ～ナヴォイ劇場と日本人抑留者資料館～

## ウズベキスタンってどんな国？

ウズベキスタンは日本からおよそ6,400km離れた中央アジアに位置しており、面積は日本のおよそ1.2倍、人口は約3,000万人、1991年にソビエト連邦（以降、ソ連）崩壊に伴い独立した国で、世界に2つしかない「二重内陸国」で、海へと出るためには国を2つ越える必要があります。（もう一つはリヒテンシュタイン）



ウズベキスタンでは「日本人のようになりなさい」という言葉が語り継がれています。なぜ日本から遠く離れた縁もゆかりもないような国で、「日本人のようになりなさい」という言葉が語り継がれているのでしょうか。

## 親日意識は「シベリア抑留と海外引揚」から

その理由は「シベリア抑留と海外引揚」にありました。

今から約70年前、第2次世界大戦末期のことです。1945年8月9日、ソ連は日ソ中立条約（※）を破り、満州（現在の中国東北部や内モンゴル自治区）、そして当時日本の領土であった朝鮮半島、南樺太などに攻め込んできました。

日本は8月15日にポツダム宣言を受け入れて降伏しましたが、8月23日までソ連軍の侵攻は続きました。ソ連はその戦闘の中で捕虜となった方に数年から十数年に渡って各地に抑留し、強制労働を強いたのです。過酷な労働や厳しい環境による栄養失調や怪我等でたくさんの方が、日本に戻ることなく亡くなったとされています。

抑留者は、シベリアや中央アジアなど各地に送られ、森林伐採や道路整備、建物建築といった様々な重労働を課せられました。

(※) 日本・ソ連はお互いに攻め込みませんという内容の国同士の約束

## 厳しい環境の中での労働

ウズベキスタンには約25,000人の抑留者が送られました。

ウズベキスタンは雨が少なく乾燥し、夏は最高気温が40度、冬は最低気温がマイナス20度にもなる、大変厳しい環境の国です。

抑留者はその中で、水力発電所や学校などの建設に従事しました。中でも有名なのが「ナヴォイ劇場」という国立の劇場です。この劇場は457人の抑留者により1945年から1946年にかけて建設された建物で、現在でもオペラやバレエの上演に使用され、ウズベキスタンの紙幣にも描かれています。



## 尊敬を受けた抑留者の行動

ナヴォイ劇場を建設した抑留者たちが収容されていた収容所「第4ラゲル」の近くに住んでいた人によると、「日本人抑留者は朝、整然と隊列を組んで出て、労働が終わった夕方にはまた整然と隊列を組んで帰ってきていた。朝に出かけるときはいつも決まった時間に通るので、彼らの歩く下駄の音を目覚まし時計代わりにしていた人もいるほどだった。」

またある人は「彼らの食事は1日300グラムの黒パンと薄いスープだけだった。その黒パンですら労働成績が悪いと減らされることがあったのだとか。ある時、大変な労働でおなかがすいているだろうからと、収容所の柵の間からパンと果物を差し入れたところ、数日後同じ場所に手作りの木のおもちゃが置かれていた。そのことを母親に伝えると母親にこう言われた。『日本人は勤勉で礼儀正しい。物を作るのもうまいえに恩を忘れない人だ。あなたも日本人のようになりなさい。』と。」

また、現在、ウズベキスタンの大統領であるカリモフ氏はこんなことを

おっしゃったそうです。「子どもの頃母親に連れられて、毎週末日本人の収容所に行った。そして、そのたびに同じことを言われた。『息子よ、ごらん、あの日本人の兵隊さんを。ロシアの兵隊が見ていなくても働く。人を見ていなくても働く。おまえも大きくなったら、日本人と同じように人を見ていなくても働く人間に必ずなりなさい。』そんな言いつけを守って育ち、今では大統領になれた。」

ナヴォイ劇場の建設に携わった日本人抑留者457人の内、2人が事故などによって現地で亡くなりました。

### 舞鶴港への引き揚げ

第二次世界大戦が終わった後、満州（現・中国東北部）や朝鮮半島をはじめ南太平洋など多くの国や地域に約660万人もの日本人が残されました。これらの方々を速やかに日本へ帰国されなければなくなり、“引き揚げ”が開始されました。呉をはじめ順次18港の引揚港が全国に次々と設置され、舞鶴もその役割を担うこととなり、主に旧満州や朝鮮半島、シベリアからの引揚者・復員兵を迎え入れる港となりました。

ナヴォイ劇場を建設した455人の日本人抑留者のほとんどが、舞鶴港に引き揚げられました。船から見える緑の山々や出迎えの着物姿の日本人を見て涙を流されたそうです。「第4ラージェル」の隊長

であった永田行夫さん（大尉）も舞鶴港に引き揚げられました。永田さんは、日本に帰国後も第4ラージェルの抑留者と連絡が取れるように、名簿を作成しようとされました。普通なら収容所で紙に名前、住所を書いて持って帰れば良いのですが、この時代は違いました。もしその名簿がソ連兵に見つかれば、廃棄されるか、最悪の場合何かの暗号か何かに間違えられ、スパイとして再び収容所送りになるかもしれません。永田さんは、455名の名前・住所・番地をすべて暗記して日本に帰国。家族と会うと暗記した名前を忘れてしまうのではと考えた永田さんは、一刻も早く自宅に



帰りたい気持ちを抑えて、上陸の後舞鶴に宿泊し、名簿として紙に書き出されました。

## タシケント第4ラーゲル会 結成

その名簿をもとに「タシケント第4ラーゲル会」が結成され、昭和24年から平成21年まで61回にわたって毎年1回交流会が開かれ、平成3年には引揚記念館に「第4ラーゲル会」の桜の記念植樹を残していただいています。また、第4ラーゲル会のメンバーの新家苞(にいのみ しげる)さんからは、抑留当時の衣服等の資料やウズベキスタンへの墓参の際に入手されたナヴォイ劇場のれんがなど、貴重な資料をご寄贈いただきました。れんがは現在、赤れんが博物館の「日本人とナヴォイ劇場」のコーナーに展示してあります。



第19回タシケント第4ラーゲル会 於、舞鶴引揚記念公園 平成3.5.19.

しかし、今では永田さんを始めとした「第4ラーゲル会」の方は最も若い方でも90歳を超え、大部分がお亡くなりになっておられ、史実をお伺いできる方も数人となっています。



## 抑留者が残した名誉

その後、ウズベキスタンは1966年に首都のタシケントのおよそ70%の住宅や建築物が倒壊する大地震に見舞われました。その中で、ナヴォイ劇場をはじめ日本人抑留者が建築に携わった建物の多くは地震に耐え、ほぼ無傷で立ち続け、家を失った人達の避難所として活用されるなど、多くの人の命を救いました。

現在でもナヴォイ劇場はもちろん、日本人がつくった発電所や建物が現役で使われており、今でもウズベキスタンでは「地震が来たら、日本人がつくった建物に逃げろ！」と語り継がれているそうです。

このように、本来なら日本への帰国ができたかもしれないのに、過酷な環境の中での強制労働、帰国の見込みも立たない抑留という絶望的な状況の中でも、日本人抑留者たちは実直、勤勉に仕事に励み、たとえ日本に帰れなくてもウズベキスタン国民に手本とされるような行動をとり、大地震でも倒れない建物を建てることで、自分たちの名誉を残そうとしました。また、ウズベキスタンの市民から受けた恩に対しては精一杯の感謝を伝えようとしてきました。

戦後、この地で強制労働に従事した抑留者一人ひとりの行動が、ウズベキスタンの人々に深い感銘を残し、日本人のイメージとなって、今の日本に対する友好的な気持ちの形成につながっています。

## ウズベキスタン国民からの「恩返し」

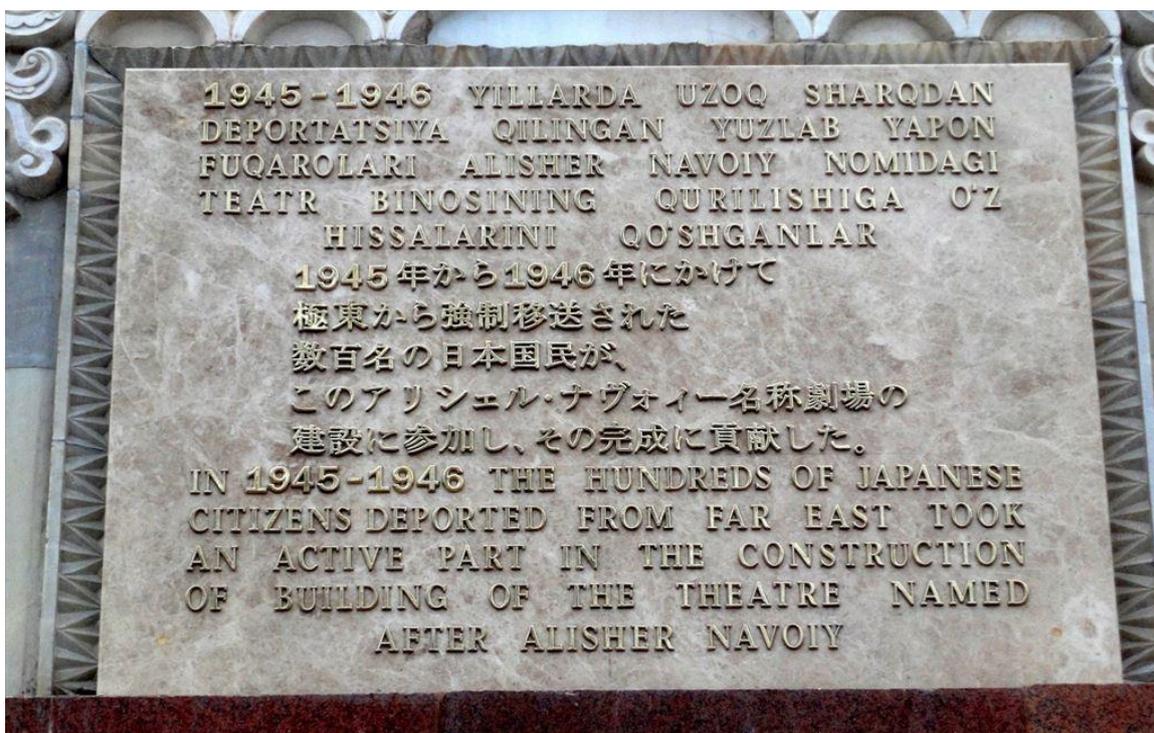
ウズベキスタンには、抑留中に亡くなった日本人抑留者の墓地が13か所あります。ソ連時代の末期に、先述のカリモフ氏に対して「日本人の墓地を1つにまとめろ」という指令がありました。当時は中央政府からの命令は絶対的なものでしたが、カリモフ氏はこれを拒否しました。その理由は「ここに眠っているのは、国づくりに貢献してくれた恩人たちである。」というものでした。その後も日本人の墓地はしっかり守られており、現地の方の手で常にお花が供えられているそうです。



また、1996年にはナヴォイ劇場に、建設に携わった日本人抑留者を讃えるプレートが設置されました。プレートには日本語でこう記されています。

“1945年から1946年にかけて強制移送された数百名の日本国民がこのアリシェル・ナヴォイー名称劇場の建設に参加し、その完成に貢献した”

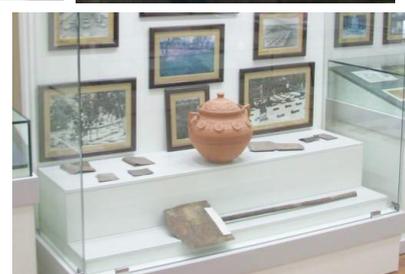
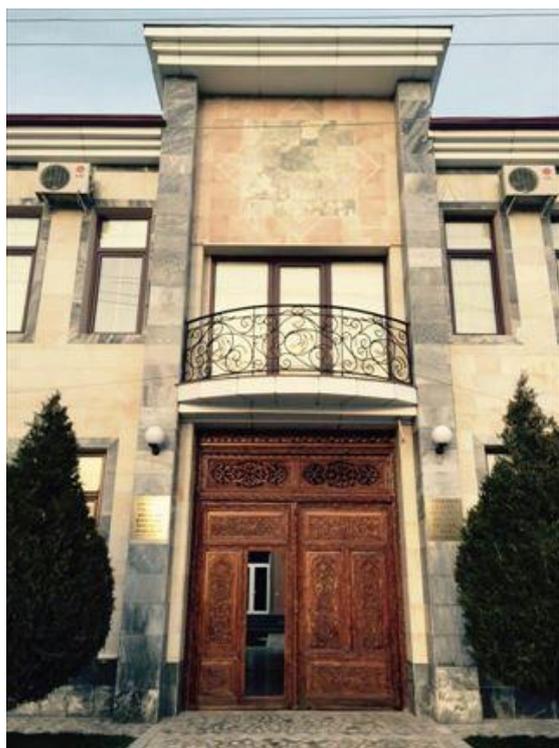
設置にあたり、カリモフ大統領は「絶対に“捕虜”という言葉を用いるな」と指示したということです。



## 私費による日本人抑留者資料館

国の関係者だけでなく、民間レベルでも日本人の偉業の記憶を残そうとする人もいらっしゃいます。首都タシケント市内で電器関連会社を経営するジャリル・スルタノフ氏は幼いころに近所の年輩の方が日本人のナヴォイ劇場の建設や高圧送電線を敷設した話や、高所で危険な仕事をしていたこと、ウズベキスタンの各地で今も残る重要な施設を作ってくれた話を聞き、日本に興味をもたれたそうです。当時、ソ連の一部であったウズベキスタンでは、日本人や日本人がウズベキスタンで行ったことを調べることは困難でしたが1991年の独立後、私費で資料の収集などを進め、1998年に日本人抑留者が残した史実を後世に伝えようと、自宅に「日本人抑留者資料館」を開設されました。そこには、日本人抑留者が使用したス

コップや手作りのスプーン、ハサミなどの生活用具や、ウズベキスタンの方に贈ったゆりかごなど貴重な資料が展示されています。開館当初、来館者は日本人がほとんどでしたが、今ではウズベキスタンの小中学生も学校単位で来館するようになったそうです。今後は資料館の拡張をすすめ、現代日本を知る研究センターを併設し、両国の友好に寄与したいと考えておられるそうです。



## 海外から引揚を通じた国際交流を

日本政府は、2015年9月、スルタノフ氏に対して日本との友好親善関係への貢献に対して外務大臣表彰を贈り、さらに10月に安倍首相一行が中央アジアを訪問した際にスルタノフさんと面会、日本へ招待の意向を伝えました。



スルタノフ氏は今年1月に日本を訪問され、1月24日にはスルタノフ氏たっての希望により舞鶴引揚記念館を訪問し小・中・高校生ら市民約120名と交流、日本人が残した功績などについてご講演いただきました。講演に先立ち、ウズベキスタンで



は日本と同様に緑茶を飲む文化があるため、市民有志から舞鶴産のお茶を振る舞いました。またスルタノフさんに同行された孫娘のリソラット・スルタノヴァさんから、ウズベキスタンの民族舞踊の披露がありました。

講演の中でスルタノフさんは、舞鶴市の児童・生徒たちに「ウズベキスタンを知らない日本人は多いと思うが、我々は日本に対して大変親しみを感じている。私の国には日本人が造った建物や施設が多く残っている。抑留

の苦しみに負けず、自分の仕事に向かっていった彼らの姿は若い皆さんが生きていく良い参考になる。」とおっしゃられました。また、自らの資料館に関しては、「今までは抑留のつらさ、悲しみに注目していたが、引揚記念館を訪れて日本人たちの祖国に帰還する喜び、祖国での生活に臨むうれしさを実感できた。今後こうした展示を祖国への帰国をテーマに新しい光を見た日本人として紹介したい」とおっしゃられました。





## 先人が築いた繋がりを次の世代に



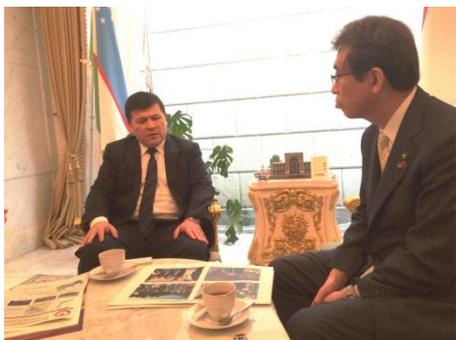
このように、日本人抑留者の行動により遠く離れたウズベキスタンで日本に対する親しみの気持が生まれ、育まれながら、現在に至っています。

舞鶴は、ナヴォイ劇場などを建設された抑留者の皆さんに、ウズベキスタンとのご縁をつくっていただきました。舞鶴市

民も戦後13年間にわたり、66万人という多くの引揚者の皆さんを温かくお迎えしましたが、ウズベキスタンの皆さんも、抑留をされていた日本人に対し温かく接していただき、また現在でも日本に対しての親近感を持っていただいています。



## 2020年東京オリンピック・パラリンピックを契機に交流を



舞鶴市では、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催とその直前合宿誘致を契機にウズベキスタンと新たな交流を始めたいと考えております。

今年2月には多々見舞鶴市長が駐日ウズベキスタン大使に対して、本市での東京オリンピック選手団直前合宿実施を要望し、大使はスポーツ分野だけでなく、文

化・経済面など様々な分野での交流を希望されました。

それを受けて4月にはウズベキスタン大使館からウズベキスタン料理のレシピを伝授いただき、10月から市内の全18小学校の給食にプロフ、ガロフスープ、サラダのウズベキスタン料理を提供し、ウズベキスタンの食文化への理解を深めました。



また、6月には「日本兵捕虜はシルクロードにオペラハウスを建てた」（角川書店）の著者である日本ウズベキスタン協会会長の嶋信彦氏が舞鶴市を訪問され、引揚記念館等を見学されました。

## 駐日ウズベキスタン大使が来訪



11月にはトゥルスノフ駐日ウズベキスタン大使が本市を訪問されました。東京オリンピック合宿候補施設の舞鶴文化公園体育館を視察され、施設やレスリングマットを確認されました。レスリングマットの感触を確かめ、大使は「合宿施設としての設備は十分に整っている」とおっしゃいました。

その後、関西電力舞鶴火力発電所などの市内の企業を視察され、市内の小学校を訪問。小学生とともにウズベキスタン料理の給食を食べ交流を深めました。児童からは歓迎の意を込めて歌を披露したほか、大使の似顔絵入りのパネルをプレゼントしました。

大使はその後、引揚記念館を訪問。世界記憶遺産に登録された資料の展示を見学されました。記念館では市内の日星高校、引



揚記念館の最寄りの中学校である若浦中学校の生徒と交流を深められました。日星高校の生徒は「今後、タシケントの日本人抑留者資料館スルタノフ館長の孫娘のリソラットさんが在籍する学校との交流をしたい。」と今後の交流の意向を伝えました。また、若浦中学校の生徒からは日本人抑留者がウズベキスタンの子どもに木のおもちゃをプレゼントした史実にちな



み、大使に手作りの木のおもちゃをプレゼントしました。大使は「ウズベクの人々は日本人抑留者を捕虜ではなく、家族・友人だと感じていた。今後様々な形で交流を進めるよう本国に伝えたい。」とおっしゃいました。



今後は大使館や日本ウズベキスタン協会の協力を得ながら引揚の史実や、シルクロード文化などをベースとしたウズベキスタンとの文化交流、経済交流やスポーツでの交流を進め、さらなる「縁」を積み重ねていきたいと考えています。



(参考文献)

嵐 信彦 著 「日本兵捕虜はシルクロードにオペラハウスを建てた」(角川書店)

中山 恭子 著 「ウズベキスタンの桜」(KTC 中央出版)

佐藤 芳直 著 「親子で読めるジュニア版 日本はこうして世界から信頼される国となった」

(プレジデント社)